

## イザヤ49-50章「主のしもべから学ぶ」

### 1A 忘れない主 49

#### 1B ヤハウエの僕 1-13

##### 1C 矢筒の中の言葉 1-6

##### 2C 集められるイスラエル 7-13

#### 2B シオン 14-26

##### 1C 新しい世代 14-21

##### 2C 国々の服従 22-26

### 2A しもべに対する応答 50

#### 1B 自分の咎 1-3

#### 2B 侮辱に打ち勝つ方 4-11

## 本文

イザヤ書 49 章を開いてください。ここからイザヤ書後半部分の第二の区切りの部分が始まります。区切りと言っても、もちろん 40 章からの話の続きになっています。40 章から 48 章には、ペルシヤの王クロスが捕囚の民を解放して、エルサレムに帰還させることが、神の救いのご計画を表していることを見ました。罪の縄目の中にいる者たちが、神の御力によって解き放たれ、主に立ち帰ることができるという慰めです。「天と地を造られた方」としてだけでなく、「罪を贖う方」として何度も主がご自身を現わしておられたことを思い出してください。

そして、49 章から 57 章には、この神の救いのご計画をいかに実現されるのか、その手段について書かれています。すでに 42 章で登場した「主のしもべ」、すなわちメシヤ、キリストによってなのだという事です。

### 1A 忘れない主 49

#### 1B ヤハウエの僕 1-13

##### 1C 矢筒の中の言葉 1-6

49:1 島々よ。私に聞け。遠い国々の民よ。耳を傾けよ。主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。49:2 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。49:3 そして、私に仰せられた。「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現わす。」

イザヤ書 41 章において、主はここで呼びかけておられるのと同じことを語られていました。「41:1 島々よ。わたしの前で静まれ。諸国の民よ。新しい力を得よ。」主はすべてを造られた方であり、ご自身を地の果てにまで、島々、遠い国々にまで現わしたいと願っておられます。これはまさに、私たち極東地域に住んでいる日本の民にも語られている言葉です。しばしば、聖書に日本が預言さ

れている箇所はあるかどうかという話題があがりますが、ここでしょう、島々、遠い国々であります。

そして、主はイスラエルをご自分のしもべとして選ばれました。41章 8-9 節に、こうあります。「しかし、わたしのしもべ、イスラエルよ。わたしが選んだヤコブ、わたしの友、アブラハムのすえよ。わたしは、あなたを地の果てから連れ出し、地のはるかな所からあなたを呼び出して言った。「あなたは、わたしのしもべ。わたしはあなたを選んで、捨てなかった。」諸国の民は、自分の願っていること、欲していることに合わせて神々を造ります。しかし、イスラエルは違います。イスラエルは、自分で神を造るのではなく、自分が神によって形造られた民です。したがって、神に対して自分はしもべであります。主は、イスラエルを選ばれて、これを愛し、これを贖うことによって諸国に対してご自分が神であることを明らかにされようとしていました。

しかし、問題がありました。それは、イスラエル本人がその使命に答えていなかったことです。バビロンの中にいる彼らは、神々に取り囲まれて生きており、埋没してしまって、自分はこれまでと変わりなく生きていくのだと勝手にみなして、新しい神の働きを信じ、受け入れなかったのです。ちょうど私たちに新しい御霊の働きを行なわれているのに、その神の愛に応答しないで、目の前にある事柄をこなしているのに埋没してしまっている自分と重なります。

そこで主は、イスラエルのために「しもべ」を与えられました。彼ら自身ではなく、彼らと一体になってくださる神に選ばれた者です。3 節に、「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現わす。」とあります。これは、イスラエルの民のことではありません。読み進めると、5 節以降を読めば、イスラエルを神のもとに集めるために、このしもべを造られたと書いてあります。イスラエルとは別の存在です。この方は、イスラエルのために来られて、イスラエルがその使命に答えるイスラエルとして回復するために、彼らの間に来てくださった方です。

例えば、イエス様の父ヨセフが、ヘロデの手から逃れるためにエジプトに下りましたが、それは、ホセア書の成就であることをマタイは語りました(2:15)。けれども、ホセア書には、「11:1 イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。」とあります。これはどうしても、エジプトからイスラエルを神が連れ出した時のことを語っているようにしか思えません。マタイは、ごり押しでこの預言の箇所をヨセフたちの逃避行に当てはめたのではないかと感じるかもしれません。いいえ、これはまさに、イスラエルのメシヤである方がイスラエルの民の歴史、その救いの中に入ってきてくださったことの表れです。主はこのように、私たちの間に入ってきて、その負の歴史から共に出発してくださる方なのです。

ですから、主のしもべについての歌が四つあります。イザヤ書 42 章 1-4 節、49 章 1-3 節、50 章 4-6 節、そして 52 章後半から 53 章にかけてあります。それは段階を踏んでいます。まず、42 章においては、この方に主の御霊が与えられて、国々にまで公義をもたらされるという預言です。この方がまこと、真実をもたらし、そして国々がその教えを待ち望むようにしてくださる、ということでもあります。いかがでしょうか、今、私たちはイスラエルからは程遠い、遠い国、遠い島に住んでい

ますが、それでも公義がここにまで及び、そしてその教えを今、実にここで仰いでいます。

そして今、第二の主のしもべの歌を読みました。主はこれらの教えをどのような形で回復されるのかが語られています。それは、「鋭い剣のような口」によって回復します。このことを説明したいと思いますが、その前にまず、この僕が召された様子が1節に書かれています。「主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。」とのことですが、イスラエルが呼ばれる時も「あなたを母の胎内にいる時から形造った方(44:24)」と言われました。自分の生命、自分の人生そのものが、完全に神に拠っているのだということを示す言葉です。そして主のしもべは、そのような形で、母の胎からお生まれになりました。生まれた時から、神のご目的があり、使命があり、名を呼ばれてその中に生きるというのです。御使いガブリエルが、マリヤに現れた時の言葉を思い出します。「ルカ 1:31-32 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。」

そして、この方の口を鋭い剣のようにすると言われます。これは、神の言葉が人の心を刺しとおす剣のような存在であることを指しています。幼子イエスを見たシメオンが、マリヤを祝福してこう言いました。「また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。「ルカ 2:34-35 ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人々が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人々の心の思いが現われるためです。」そして主の言葉は、反対する者たちに対しては最後に、滅ぼすための剣となります。「黙示 19:15 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。」

しかし、主は剣のような言葉を、慎重に隠しながら語っていたという表現が使われています。「御手の陰に私を隠し、私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。」とあります。これはどういふことでしょうか？42章の公義をもたらす、しもべの歌にあったように、「痛んだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす」ということでもあります。主はへりくだった姿で生涯を送られました。貧しいナザレに住むユダヤ人の家庭に生まれ、そこで三十歳まで住み、それからガリラヤの片田舎で御言葉を語っておられました。それはとって小さな働きのように見えながら、それでいて人々の間に広まり、そして今や国々にまで広まっています。そのままの剣の言葉を語るならば、人々はたちまち滅んでしまいますが、主は人々が立ち上がることができるよう、ご自身の栄光の完全な姿をお見せすることなく御言葉を語られたのです。

ですから私たちの日々の、こんな小さな者たちの、こんな小さな生活の中で主は私たちをご自分の言葉で建て上げてくださっています。この小さき声に聞き続けているか？であります。

49:4 しかし、私は言った。「私はむだな骨折りをして、いたずらに、むなしく、私の力を使い果たした。それでも、私の正しい訴えは、主とともにあり、私の報酬は、私の神とともにある。」

主のしもべご自身が、このようなことを言われています。そうですね、イエス様の言葉は一気に広まりましたが、しかし多くの群衆はイエス様から離れました。弟子たちでさえ、離れていきました。カペナウムの会堂で教えておられた時に、弟子たちの多くが、「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか。(ヨハネ 6:60)」と言って、離れていきました。主が柔和に、へりくだって語っておられるからこそ、心を砕かない者たちは悟らないで離れていってしまうのです。愛の営みというのは、このように裏切られます。自分の力をいたずらに使い果たすような思いをします。まさに私たちの主イエスが、このところを通ったのです。

しかし、この正しい訴えは必ず神の前にあります。イエス様の訴えは父なる神に届けられました。同じように、この方に付いてくる者も地上では無駄な骨折りのような思いをしたとしても、主ご自身が豊かに報いてくださるのです。「ヘブル 6:10 神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」

49:5 今、主は仰せられる。・・主はヤコブをご自分のもとに帰らせ、イスラエルをご自分のもとに集めるために、私が母の胎内にいる時、私をご自分のしもべとして造られた。私は主に尊ばれ、私の神は私の力となられた。・・49:6 主は仰せられる。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」

主の僕はその生涯の中では無駄に思えるようなことをしたように見えても、しかし、主はイエス様を用いられました。一人一人と、イスラエルの失われた羊を捜していられました。イエス様は取税人ザアカイの悔い改めを大変喜ばれました、「ルカ 19:10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」バルテマイという盲人の乞食が、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と言って叫び、イエス様は、「あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われました(マルコ 11:48, 52)。確かにイエス様は、ご自身に神からの使命があることを知り、父なる神がご自身に力を与えられていたことを感じ取っておられました。そして、主はご自身が地上に戻られる時には、イスラエルをみな主に帰らせることを知っておられました。天の果てから果てまで、四方から選びの民を集める、と言われました(マタイ 24:31)。

そしてイスラエル人たちだけではありません。主は、イスラエルを選ばれたのは、あくまでも救いのご計画を推進する器として選ばれたのであって、救いは諸国の民にも向かっておられたのです。イエスご自身が、宣教旅行の後期にシドンに行かれたり、デカポリス地方を通られたりしました。ローマ人の百人隊長にも癒しをお与えになりました。そして異邦人への宣教は、使徒たちが聖霊に突き動かされることによって、カイザリヤの百人隊長コルネリオを始めとし、異邦人に福音を伝えるパウロを選ばれたりし、主は地の果てまでの救いを意図しておられました。そして、この無駄にも思える主の働きで、私たちにも救いをもたらされています。ですから、私たちがキリストの使者として、同じところを通っているのです。無駄に思えるかもしれない宣教の営み、これを主は尊いと

みなしておられ、私たちに力を与えておられます。

### 2C 集められるイスラエル 7-13

49:7 イスラエルを贖う、その聖なる方、主は、人にさげすまれている者、民に忌みきらわれている者、支配者たちの奴隷に向かってこう仰せられる。「王たちは見て立ち上がり、首長たちもひれ伏す。主が真実であり、イスラエルの聖なる方があなたを選んだからである。」

この「あなた」は、主のしもべ、つまりイエス・キリストご自身です。主は、人にさげすまれました。民に忌み嫌われました。そして、支配者たちに服従されました。十字架刑に処せられる時の、ヘロデ・アンティパスと、ローマ総督ピラトです。そして驚くことは、この方を神は、王たちがひれ伏し、首長たちもひれ伏す方にしていくということです。ピリピ書 2 章には、キリストが十字架の死に至るまで神に従順であったので、神はこの方を引き上げて、すべての名にまさる名をお与えになった、そしてすべての口、すべての舌がひれ伏して、「イエスが主である」と告白するようになることが書かれています。そしてそれは、主が真実な方であることを示すためです。主は、私たちにも真実を尽くしてください。

49:8 主はこう仰せられる。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。わたしはあなたを見守り、あなたを民の契約とし、国を興し、荒れ果てたゆずりの地を継がせよう。」

パウロは 8 節のイザヤの預言を取って、コリント第二でこう言いました。「6:2「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」今が恵みの時、今が救いの日と大胆に言いました。なぜそこまで言うことができたのか？それは、イエス様が復活されたからです。卑しめられたこの方が甦り、確かにこの方が神の御子であることが明らかにされたからです。そして主は天に昇られて、神の右の座に座られました。このような恵みの時、救いの日にいるのだとパウロは述べています。もう既に二千年以上経っています。しかし、主の目には千年は一日のようであり、一日は千年のようであります。私たちはパウロと同じように、今が恵みの時、今が救いの日と宣言する時代に生きています。

そして、今でこそ異邦人之間にご自分の名が言い広められていますが、主が弟子たちと最後の過越の祭りの食事をされて、「これが、新しい契約のために流される血です」と言われて、ぶどう酒の杯を回されたように、イスラエルも国民として新しい契約の中に入る時が近づいているというこ

とであります。それに先行するように、すでにイスラエルは国を興して、荒れ果てた地を継いでいますが、完全な回復は再臨の時を待ちます。

49:9 わたしは捕われ人には『出よ。』と言い、やみの中にいる者には『姿を現わせ。』と言う。彼らは道すがら羊を飼い、裸の丘の至る所が、彼らの牧場となる。49:10 彼らは飢えず、渴かず、熱も太陽も彼らを打たない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、水のわく所に連れて行くからだ。

これは将来起こることですが、イエス様が初めに来られた時にも一部、成就していました。悪霊に捕われていた人々から悪霊を追い出された時に、確かに捕われ人の解放を行われました。そして主が再び来られる時に、このことは物理的にも完全に成就します。しかしこの言葉を聞いた、バビロン捕囚の民としても、慰められたことでしょう。帰ってから、その地が荒れ果てているのではないか。水がないままではないか？と思っているかもしれません。けれども、主が必ず守り、養ってくださるという約束です。

49:11 わたしは、わたしの山々をすべて道とし、わたしの大路を高くする。49:12 見よ。ある者は遠くから来る。また、ある者は北から西から、また、ある者はシニムの地から来る。」

イザヤの預言にある、頻繁に出てくる約束です。世界に離散しているユダヤ人のために、主が大路を整えてくださるという約束です。当時の路は今のような舗装はされておらず、岩や石が多くありました。また山地を歩くのは至難の業です。けれども主は、それをまっすぐにしてくださいます。その方角が至る所からであります。北から西から来ます。北はロシア、西はヨーロッパでしょう。そして、「シニムの地」とありますが今のヘブライ語では、これは中国を表します。けれども意見が分かれて、エジプトの南のことを当時は指していたのではないかとされています。いずれにしてもエジプトの南であれば、はるか南方から、中国であればはるか東方から来るということです。

49:13 天よ。喜び歌え。地よ。楽しめ。山々よ。喜びの歌声をあげよ。主がご自分の民を慰め、その悩める者をあわれまれるからだ。

主がご自分の民を慰められるとき、悩む者を憐れむ時に、天地が喜び踊ります。これは、44章23節にも出てくる言葉であり、そこではイスラエルの民の罪が雲のように、霞のように拭い去れた時に、天地が喜び踊っています。これはすばらしい約束です。アダムの際のことを思い出すのです。彼が罪を犯したから、地が呪われました。茨を生じさせる土地となりました。けれども、第二のアダムであるキリストが罪を取り除かれたので、今度は被造物が祝福されるのです。私は、ある人が救われる時に、罪の赦しの慰めを受け、悩みへの憐れみが与えられる時、天では御使いが大祝会を開いていると、主の言葉によって信じていますが、それと同時に、天と地も喜び踊っているのではないかと信じようと思います。もちろん比喩的な表現ですが、世界の刷新が近づいているのだという嬉しい期待です。

## 2B シオン 14-26

### 1C 新しい世代 14-21

49:14 しかし、シオンは言った。「主は私を見捨てた。主は私を忘れた。」と。49:15 「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。

49章から57章までの第二の区分において、特徴的なのは「主のしもべの歌」だけではなく、ここ

にあるように「シオン」あるいは「エルサレム」の町への慰めであります。40-48 章では、ヤコブあるいはイスラエルの民に対する慰めでありましたが、ここではシオンあるいはエルサレムをまるで人であるかのように語りかけていく預言となっています。

「主は私を見捨てた。主は私を忘れた。」というのは、エルサレムが異邦人によって踏み荒らされて、そこに人が住まなくなった廃墟となったという嘆きであります。イスラエル旅行に一緒に行った方は、私たちが遺跡と呼ばれているところに行った時に、それがいわゆる廃墟の跡であることを思い出すことは必要です。私たちとしては、過去に何があったかに思いを馳せるわくわくするところですが、同時に、「当時は栄えていたが、今は誰一人住まなくなった。」ことに現れです。しかし、今のエルサレムはいかがでしょうか？旧市街の中を歩きましたが、そこは本来なら他の遺跡の町と同じように、遺跡そのものであるはずなのです。しかし、そこには人々が住んでいてひしめきあっており、百年ぐらい前に人々が住みきれないので、新市街と言って旧市街の西側に新たな住む所を作ったほどなのです。

「主は私を見捨てた。主は私を忘れた。」ということは、私たちも抱く感情ではないでしょうか。約束されている祝福が見えない。それとは裏腹のことが起こっている。そのような時に感じます。しかし、主は乳飲み子を持つ母親を例にとり、絶対にそんなことはないと言われたい。まず、そんなことはしないとされます。いや、たまに乳飲み子を見捨てる事件を見聞きしますが、人間の母親にはそんなことがあっても、わたしはそんなことはしないと宣言しておられます。

49:16 見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。

これは、主が完全にシオンを守っておられる、救いは保障されているという約束です。「手の平の中に刻む」という表現は、主ご自身も使われました。「ヨハネ 10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」そして、「あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。」という言葉は私たちには、あまり心に響かないかもしれません。当時の城壁は、自分の生死を決めるものでした。そこに入らないと、外敵に襲われたり、食や水に困るといって死に近いものでした。ですから、城壁の前に主がおられるというのは、「自分の命を守るその境界線に、主がいつもおられる。」ということです。みなさんの城壁はどこにあるのでしょうか？これを取られたら自分はやくなってしまふ、という城壁はどこでしょうか？その城壁は、いつも主の前におかれています。主がその城壁であります。

49:17 あなたの子どもたちは急いで来る。あなたを滅ぼし、あなたを廃墟とした者は、あなたのところから出て行く。49:18 目を上げて、あたりを見回せ。彼らはみな集まって、あなたのところに来る。わたしは生きている。主の御告げ。あなたは必ず、彼らをみな飾り物として身につけ、花嫁のように彼らを帯に結ぶ。

突如として、イスラエルの子孫がエルサレム内にやって来るという預言です。

49:19 必ず、あなたの廃墟と荒れ跡と滅びた地は、いまに、人が住むには狭すぎるようになり、あなたを滅ぼした者たちは遠くへ離れ去る。49:20 あなたが子を失って後に生まれた子らが、再びあなたの耳に言おう。『この場所は、私には狭すぎる。私が住めるように、場所をあけてもらいたい。』と。49:21 そのとき、あなたは心の中で言おう。『だれが私に、この者たちを生んでくれたのだろう。私は子に死なれた女、うまずめ、亡命のさすらい者であったのに。だれがこの者たちを育てたのだろう。見よ。私は、ただひとり、残されていたのに、この者たちはどこから来たのだろう。』

やって来たイスラエル人の数は多すぎて、それでもっと場所を空けてもらいたい、つまりもっと大きな町にしてほしいと言っています。エルサレムとしては、「この人たちはいったい誰だろう？」と思っています。なぜか？あまりにも人の住まない期間が長過ぎたからです。けれども、離散の地でイスラエルの子孫が綿々と生き残り、それである時に一気に、ずっと後世の子孫がエルサレムに押し寄せてくるという預言であります。

この預言を見ると、とてもとても不思議です。前世紀の始まりから、ロシアやヨーロッパを中心にユダヤ人が怒濤のごとくイスラエルに押し寄せました。そして1948年にイスラエルは建国され、その日にアラブ諸国がイスラエルを一気に攻め込みました。その時に、周辺の中東地域に長年、離散の民として生きていたユダヤ人が、それぞれの国によって追い出され、財産の没収がされました。85万人にいたといわれています。彼らが独立戦争の後から押し寄せて入ってきたのです。そしてソ連や東ヨーロッパが崩壊して、そこにいたユダヤ人が押し寄せて、イスラエルは帰還民の避難所として今も機能しつづけています。エルサレムの町は、遺跡の丘として残っていて全然おかしくないのに、そこに全く新しい世代の人々が住みついているのです。そして、このことが、イエス様が再臨される時に完成されます。

### 2C 国々の服従 22-26

49:22 神である主はこう仰せられる。「見よ。わたしは国々に向かって手を上げ、わたしの旗を国々の民に向かって掲げる。彼らは、あなたの息子たちをふところに抱いて来、あなたの娘たちは肩に負われて来る。49:23 王たちはあなたの世話をする者となり、王妃たちはあなたのうぼとなる。彼らは顔を地につけて、あなたを伏し拝み、あなたの足のちりをなめる。あなたは、わたしが主であることを知る。わたしを待ち望む者は恥を見ることがない。」

主は、離散した彼らが住んでいる国々で、その国々の指導者が全面的に後押しして、彼らの帰還を助けることを示しています。かつては世界を支配していた大英帝国が、バルフォア宣言によってユダヤ人の民族郷土の宣言をしました。王や女王の後押しがあって、帰還できたのです。日本に住んでいるあるイスラエル人の人と会話したことがあります。「なぜ世界は、あんな小さな国に注目を集めているのだろう。」と漏らしていました。そうですね、世界各国の指導者が、イスラエルとパレスチナの関係についてなぜこれほどまでに関心を寄せて、介入しようとしているのか、不思議であります。将来的に、主がエルサレムに戻って来られるからです。そして、王の王であるキリストがそこにおられるので、ユダヤ人に対しても自分たちが仕えるという立場を取ります。



49:24 奪われた物を勇士から取り戻せようか。罪のないとりこたちを助け出せようか。49:25 まことに、主はこう仰せられる。「勇士のとりこは取り戻され、横暴な者に奪われた物も奪い返される。あなたの争う者とわたしは争い、あなたの子らをこのわたしが救う。49:26 わたしは、あなたをしいたげる者に、彼ら自身の肉を食らわせる。彼らは甘いぶどう酒に酔うように、自分自身の血に酔う。すべての者が、わたしが主、あなたの救い主、あなたの贖い主、ヤコブの力強い者であることを知る。」

これまでイスラエル人から奪っていた者たちは、主によって取り除かれます。そして、自分に争う者たちは主が争ってくださいます。エルサレムを虐げる者には、その虐げを本人に向けさせます。そのことによってご自身が力強い者であることを示されます。終わりの日には、エルサレムに攻めてくるすべての国々の軍隊を、イエス様が一気にご自分の口から出てくる剣でもって滅ぼされます。

この信仰を、私たちは持つ必要があります。私たちの前にはいつも、私たちの霊的財産を奪い取ろうとしている敵が待ち構えています。私たちがキリストにあつて神に愛され、選ばれ、義と認められたという部分を、猛攻撃してきます。そこにしっかりと信仰を働かせ、真理の帯を締めて、信仰による神の義の胸当てをしっかりとつける必要があるのです。「ローマ 8:31-34 では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。」

## **2A しもべに対する応答 50**

このような慰めを与えられましたが、しかしこの預言を聞いている者たちには、まだ心の用意ができていない者たちが多くいました。神の慰めを受けることのできない人々がいます。どのような人が、神の慰めを受けられないのでしょうか？第一に、「自分が何をしているか、分かっていない」人です。自分が罪を犯しているということを知らない人です。罪を認めない人は、神の愛を知りません。神の愛は、その聖さと義と共に流れてくるからです。第二に、「神の主権と力を認められない人」です。神は、私たちの思いや理解を超えて事を行なわれています。そして、必ずすべての事を動かしておられます。それを信じられない人は、慰めを受けることができません。

## **1B 自分の咎 1-3**

50:1 主はこう仰せられる。「あなたがたの母親の離婚状は、どこにあるか。わたしが彼女を追い出したというのなら。あるいは、その債権者はだれなのか。わたしがあなたがたを売ったというのなら。見よ。あなたがたは、自分の咎のために売られ、あなたがたのそむきの罪のために、あなたがたの母親は追い出されたのだ。」

今話した、「自分のしていることが、分かっていない」人たちのことであります。主は、イスラエルの先祖のことを「あなたがたの母親」と呼ばれています。イスラエルに対して、主が離婚状を出した、つまりイスラエルをご自分の妻とすることをやめたという記録はどこにあるのか、ということです。彼らに対して主が見捨てたという記録があるなら、見せてみなさいと言われていました。それから債権者もそうですが、その罪の負債を神がイスラエルに請求したことがあるのか？いや、むしろご自身で負って、それを帳消しにすることはされても、彼らに請求して彼らを獄吏に入れるようなことはされていません。

問題は、「自分の咎のために売られ、あなたがたのそむきの罪のために、あなたがたの母親は追い出されたのだ。」なのであります。主はイスラエルをいつまでもご自分のところに置きたいと願われているのに、イスラエルが神に反抗して、罪を犯して、神から離れたのです。彼らの罪と咎が彼らを神から引き離したのです。放蕩息子の喩えが分かり易いでしょう、誰がその息子を引き離したのですか？父親ではありません、自分の欲望と父への反抗です。

私たち人間は、あまりにも表面的になりすぎています。何か良くないことが起こっていると、その表面をなぞって、それで「主が私たちと共におられる、おられない。」と判断しています。捧げた祈りが聞かれているかどうか、いや聞かれていないような祈りでさえ、実は主が何かを語っておられて、私たちが清めようとされています。あるいは聞かれたように見える祈りでさえ、それを有頂天になって喜んでいる中で、実は主は別の御心を示そうとしておられるかもしれません。

50:2 なぜ、わたしが来たとき、だれもおらず、わたしが呼んだのに、だれも答えなかったのか。わたしの手が短くて贖うことができないのか。わたしには救い出す力がないと言うのか。見よ。わたしは、しかって海を干上がらせ、多くの川を荒野とする。その魚は水がなくて臭くなり、渇きのために死に絶える。50:3 わたしは天をやみでおおい、荒布をそのおおいとする。」

これが、「神の主権と力を信じていない」ことであります。自分たちがバビロンの捕囚になっている時に、それは主が贖おうとしているが、その力がないからだと思っ心の中で思っています。バビロンの中にいることは、神の無力を証明しているかのように見えています。これはとんでもない間違いです。むしろ、バビロンに彼らがいるということは、神がそのようにさせた、その力の現われなのです。主は、ネブカデネザル王を「わたしのしもべ」とまで呼ばれました。クロス王を「わたしのしもべ」と呼ばれたように、ユダヤ人を捕え移したバビロンの王も主のしもべだったのです。そこに神は力を現わしておられます。主はすでに、エジプトの中で多くの災いを下されて、その力を現わされましたが、彼らは気づいていませんでしたが、エルサレムの荒廃も同じように主がバビロンを通して行なわれていました。

このことを認めることは辛いことでしょう。どうしても、「主よ、なぜこのことをなされないのですか？無力なのですか？」と言いたくなりますが、実は、「わたしが、その状況を造っているのだ。」と言われてることを認めることは難しいです。しかし、主はそこで何かを語っておられます。それを

認めることによって、初めて主の声が聞こえます。そして、自分の心が砕かれ、神の豊かな憐れみにあずかることができるのです。

## 2B 侮辱に打ち勝つ方 4-11

50:4 神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。50:5 神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きもせず、50:6 打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。

自分のしていることに気づかない、また神の主権と力を認めない者たちに対して、それでもなお真実をもって、矢筒に隠した矢のように御言葉を語る主イエスの姿です。頑なな民に対して、主はなおも仕えられました。それは一にも二にも、父なる神ご自身からご自身が召されたのだ、人として現れること、女から生まれる者とされたこと、このことをわきまえておられました。そして、人となられただけでなく、さらに人からの侮辱を受けることも御父から言われていることとして、服従されたのです。そして次が、あまり知られていないことです。人としての主イエスは、心の中でこのような侮辱に対して、どのように対処されたのかを見ることができます。

50:7 しかし、神である主は、私を助ける。それゆえ、私は、侮辱されなかった。それゆえ、私は顔を火打石のようにし、恥を見てはならないと知った。50:8 私を義とする方が近くにおられる。だれが私と争うのか。さあ、さばきの座に共に立とう。どんな者が、私を訴えるのか。私のところに出て来い。50:9 見よ。神である主が、私を助ける。だれが私を罪に定めるのか。見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。

イエス様は、この侮辱を単なる侮辱として受け入れたくありませんでした。これは、父の御心のゆえの侮辱なのだ、だから私はここで恥を受けないと決められました。恥は、聖書の中で失望や落胆に関連します。つまり、意味もなく酷い仕打ちを受けていると思うことが恥です。イエス様はこれを決然と拒まれました。

このキリストがおられるので、キリスト者の苦しみには何か勇敢なものがあります。イエス様を描く十字架への道の映画には、それが良く描かれています。主は、ゲッセマネの園で既に勝利を収めておられました。父の御心にご自身を任せることをそこで決めておられました。だから、その後どんな仕打ちを受けても、主はそれをむしろ勢いよく、ある意味で攻撃的に受け入れ、ゆえにユダヤ人の裁判においても、ローマ総督の裁判においても、どちらがうろたえていたかという、実は判決を下すほうだったのです。無罪のものをどうやって、有罪にするのか？カヤパ邸においては、彼らの規定した裁判の掟を自らことごとく破ることによってのみしか、イエス様を有罪にできなかったのです。そしてピラトも、全く無罪であることを知りながら、ローマ法に反して、無実のものを有罪にせざるを得なかったのです。そしてイエス様に付いていく者たちにも、その受ける迫害には決然とした魂を見ることができます。決して敗北者ではないのです。

そして、主はご自分の義を、父なる神に求めました。「私を義とする方が近くにおられる。」と言われていました。自分は不当な仕打ちを受けていますが、ご自身の義を彼らに認めてもらおうと試みず、むしろ神に義とみなされることを求められました。罪を犯した者が死に処せられます。しかし、イエス様は罪を犯されませんでした。ですから、イエス様は死んだままではいられなかったのです。神は、その義をもってイエス様を死んだのに甦らせてくださったのです。私たちは、イエス様のようなではありません。罪人です、しかし、神の恵みによって義人とみなされた者たちです。ですから、同じように不当な仕打ちを受けた時に、自分がどんなに正しいことをしているのかと擁護するのではなく、義と認めてくださる方は主なのですから、この方であって自分を守ればよいのです。

そして 9 節は、罪に定めた者たちが、かえって罪に定められることを語っておられます。「さばく者は、さばかれる。」のです。

50:10 あなたがたのうち、だれが主を恐れ、そのしもべの声に聞き従うのか。暗やみの中を歩き、光を持たない者は、主の御名に信頼し、自分の神に投げ頼め。50:11 見よ。あなたがたはみな、火をともし、燃えさしを身に帯びている。あなたがたは自分たちの火のあかりを持ち、火をつけた燃えさしを持って歩くがよい。このことはわたしの手によってあなたがたに起こり、あなたがたは、苦しみのうちに伏し倒れる。

主のしもべの声に聞き従わない者たちは、暗闇の中にいます。そこで主は、「神を信じなさい。」と勧めておられます。そして、彼らが裁かれるのは、暗闇の中に自分はいないとして、自分自身の光を持っていることによって裁かれます。自分のもっている火が、そのまま自分の体に付いて、それで燃えて滅んでしまうのです。ことさらに悪いことをしていないのに、神はその無実の者を火の池に投げ込まれるわけではありません。自分が罪の赦しは必要ない、自分の光の中に生きると拒んでいたから、その罪がそのまま残って火の中で苦しむのです。主は、贖われる方です。なんとかして、この和解の言葉を受け入れなさいと言われます。今が救いの日、今が恵みの時なのです。